

受け継いできた「心」の中にある 清く明るく正しく直く生きる術

最も古く、最も新しい場所。それが神社や寺院であり、数多くの歴史ある神社・寺院を有する、歴史と伝統文化の精神的支柱としての神仏和合の宗教都市・京都の地もまた、もちろんそうであるとは思いません。

古来、有形無形を問わず、その時代の最高のもの、最新のものが、まづもって神仏に捧げられ、大切に守り伝えられてきました。

人々は、山川草木など自然万物は元より身近なものに至るまで、そこに神々の存在を見出し、「もの」を大切に生きてきました。その「もの」とは、自身自身の生き方や考え方を映し出す「心」であり、まず始めに大切にすべき「心」の二つが「感謝の心」であると思います。

私たちは、自然の恵みによって生かされている、自分の周りの人々やもの

京に残る多くの文化遺産には まだ意外な可能性が秘められている

昨年は、光悦の芸術村が家康に許されてから400年を記念しての催しが賑やかだった。光悦、宗達、光琳、乾山、彼ら琳派の天才たちは、共に17世紀の京都町人で、伊藤若冲は、京都錦小路に生を受けた商人の出身だった。

光悦の家業は武家に伝わる刀剣の鑑識と研ぎ。光琳は、宮廷に小袖を用達する雁金屋の出身。宗達の家業は「絵屋」と呼ばれたが、現在いうところの

京都は単なる観光都市ではなく 千年の歴史を持つ都市である

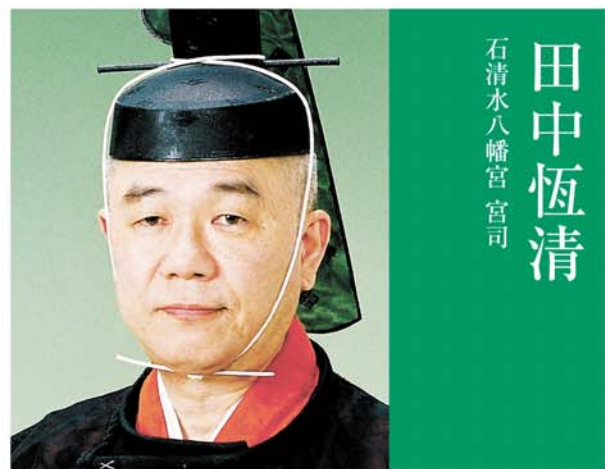
平安京が1200年前に造営されたときに、みやこの表門として設けられたのが羅城門である。それから200年足らずの間に二度の大風に見まわられて倒壊して以後は忘れ去られていた。大正時代に芥川龍之介により小説「羅生門」として蘇り、そして昭和には黒澤明の同名の映画として、広く知られるようになったのである。

京都の建都1200年祭には羅城門

「声」が主流だった日本の伝統音楽 感性より、美の規範性という問題

声のための作品が少ない。現代邦楽の話である。作曲家は和楽器を使って素晴らしい曲を作ってきたが、日本の伝統音楽の主流は声である。

数少ない中に、例えばソプラノと箏を組み合わせた作品が複数ある。地歌がもとになっているのだから、地歌は箏と演奏するから。作曲家は日本の伝統音楽の声をよく知らなかったのだから、宮城道雄など邦楽出身の作曲家



田中恒清
石清水八幡宮宮司

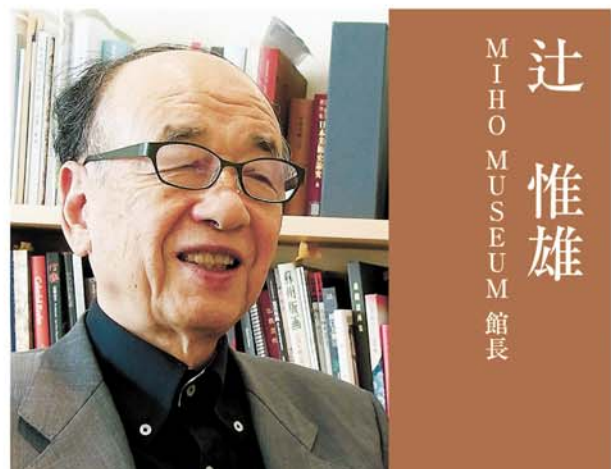
によって生かされているという感謝の念を捧げる場所が神社・寺院であるといえましょう。そこには、他の人を思いやり、万物の平和を願う心、祈りの心が、おのずと芽生えてきます。

そして私たち日本人は、その心を忘れることなく、次の世代へ、また次の世代へと受け継いできました。

当然ながら、戻ることもなく過ぎゆく時間、時代とともに人もまた移り変わっていきます。目の当たりにして世界が、いつかは変わってしまいます。それを避けることはできません。しかし、その「心」を繋いでいくことはでき

受け継がれてきた神仏への畏敬の念、自然万物への感謝の心、先人たちの叡智の中にこそ、清く明るく正しく直く生きる術がみついています。そして今に生きる私たちは、今の時代に寄り添った形を求めながら、未来のために、次代のために、その「心」を大切に守り伝え、変化を恐れずに歩みを進めなければなりません。

神仏の御加護をいただき、多くの伝統文化を継承してきた日本人の心宿る京都が、ますますその発信の拠点として、最も古く、最も新しい場所であり続けることを願ってやみません。



辻 惟雄
MIHO MUSEUM 館長

り北の方はまだ無事だが...。東京の西隣に住みながら、年老いて私ますます感じるのには、京都が日本文化のよりどころだということである。19世紀における西洋文明との出会い以来、それは消滅の危機にさらされた。京を愛した川端康成は、親交のあった東山魁夷に「京都の景観はまもなくなくなると、今のうちに描き留めておくよ」と勧めた。現在の京都の風景は、川端の予言通りになりつつあるのだろうか。

とはいえ、残されたものもまだある。京都の街並みは今でも清潔に掃き清め

「燕子花図屏風」の画中に咲き並ぶ花の一つ一つの高低と間をそのままコンピュータでスコアに写し、電子音楽として再生させたものだった。光琳の視覚を現代の聴覚に置き換えたこの試みは、音楽に疎い私の耳にも斬新な音リズムを伝えてくれた。京都人の意地と心意気がそこにはあった。この作品はパリでも紹介されたと思う。

琳派だけでなく、京に残る文化遺産のさまざまなには、まだ意外な可能性が秘められている。それをどう引き出すかは、若い世代に課せられた課題であろう。



土岐憲三
立命館大学衣笠総合研究機構
歴史都市防災研究所教授

面の東隣のメルパルクビルの地下に取まっている。横幅が約12メートル、高さが3メートルあり、朱塗りの美しい姿を見ることが出来る。

4年前に発足した「明日の京都文化遺産プラットフォーム」は、各種の短期・中期・長期プロジェクトを計画・実施中であるが、それらの中で実現までもっとも長期間を要する事業が羅城門の復元計画である。この計画の実現には多くの費用と数十年に及ぶ年月を要するであろうが、その意義の理解と支援を得るために、多くの人々が訪れる京都駅前にも模型を地下から取り

いま、京都を訪れる人は眼前に広がる景色を一枚のパラマ写真としてしか見ることができない。その写真の中には歴史年代は記されていないが、写っている全てのものはそれぞれ異なる歴史を持つており、10年前と100年前の写真には違ったものが写し撮られているのである。そして千年前に遡れば無残に崩壊した羅城門も見える。その羅城門の再建途上の様子も現在の京都の歴史的建造物と重ねて見ることが通じて、京都は単なる観光都市ではなく千年以上わたる歴史を持つ都市であることを実感できるであろう。



時田アリソン
京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター所長

の声と邦楽の声が多めに違うので、両方を鑑賞しにくいことは分かる。そこには感性よりは、美の規範性という問題が横たわっている。日本人の耳が西洋音楽に向くようになってから、西洋の音が「自然」で「美しい」はずだと思ってしまうようになっておかしくない。

日本の歌声は近代に入ってから、西洋音楽の発声に切り替わっている。明治政府の音楽教育政策の焦点は唱歌であり、モデルは異文化である西洋だった。西洋の民謡や歌曲の旋律をそのまま利用して、日本語の歌詞をあてた。音階は長調と短調で、都節、民謡音階

そこにはない。小学校教育から日本人の耳は変わり始めた。その影響は軍歌、童謡、歌謡曲、演歌、J-POPまで及んだ。こうして日本の声を聴くことは勧められず、機会も少なく、その存在すら知らなくともよくなくなった。地歌、浄瑠璃など近世邦楽の声は決して、民謡の声は小節が多くて滑らかさを欠き、とくに囃子詞などあられもなく感じられて、なじまない人も少なくある。だが、時間を遡るともともと素直な声がある。能の謡はオペラの低い声部の発声法と共通するところがあり、のびやかであり、声明はピブライトは



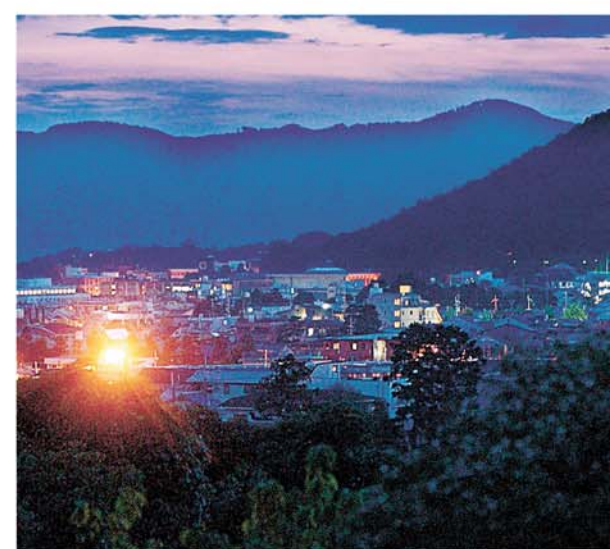
●たなか・つねきよ
1944年、京都府生まれ。69年、國學院大神道学専攻科修了。平安神宮権補宮、石清水八幡宮権補宮・補宮・権宮司を経て、2001年、石清水八幡宮宮司に就任。02年、京都府神社庁長、04年、神社本庁副総長を務め、10年、神社本庁総長に就任。



●つじ・のぶお
1932年、名古屋生まれ。東京大学大学院修了。東京大学教授、国際日本文化研究センター教授など歴任後、多摩美術大学長を経て2006年7月から現職。著書に「奇想の系譜」「日本美術の歴史」など多数。絵画史を書き換える画期的な著作を発表し、伊藤若冲らの再評価の火付け役になった。



●とき-けんぞう
1938年、香川県生まれ。66年、京都大学大学院工学研究科博士課程修了。76年、京都大学防災研究所教授。京都大学大学院工学研究科長、工学部長、京都大総長補佐、立命館理工学部教授、立命館都市防災研究センター長などを歴任。専門は地震工学。NPO「災害から文化財を守る会」理事長、「明日の京都 文化遺産プラットフォーム」副会長などを歴任。



●ときた・ありそん
1947年、オーストラリア・メルボルン生まれ。69年メルボルン大学卒業。89年、モナシュ大学(日本研究学科)博士課程修了。モナシュ大学日本研究学科准教授、同大日本研究センター所長、東京工業大外国語研究センター教授などを歴任後、京都市立芸術大学伝統音楽研究センター客員教授を経て現職。専門は語り物、三味線音楽、東アジアの音楽と近代。